

日本の唱歌と童謡について ～ 春夏秋冬の歌を中心に ～



講師: 札幌国際大学人文学部心理学科子ども心理専攻教授 須藤宏志先生

猛暑の夏が終わり秋へと移り変わる爽やかな陽ざしのもと、昨年(2025 年)に最初の「秋の歌」講座が開講され、今年(2026 年)「夏の歌」講座を終えるまで、4 つの季節を巡る 1 年かけての開催となりました。

開催教室・ピアノ実習室に入った瞬間に「あっ！グランドピアノがある！」と喜ぶ受講者の声。50 から 70 歳代の歌が好きな方、歌の成り立ちに興味を持った方々が参加されました。

講師は、本学ハンドベル・クワイアの顧問として演奏指導を行う傍ら、ハンドベルのための楽曲も作曲される、ピアニストの須藤宏志先生です。

日本の唱歌と童謡の違いと特性、誕生した時代背景を押さえつつ、各歌の作詞家・作曲家が生み出した歌の成り立ちを聴く。そして講座の最後ではやさしく口ずさめる歌を歌います。

日本の四季と季節折々の行事、子どもや親子、擬人化した動物や植物の様子など、歌詞には随所に美しい日本語とメロディで構成・表現されているという解説を受けると、歌ってみて今更ながら気がつきます。

しかし、昨今、懐かしい日本の情景というものが、若い世代には馴染みがなく想像が追いつきません。昔ながらの言葉の意味には理解が及ばないことに加え、今の家族構成や日常生活の違い、自然環境の変化など、歌詞で表現されている情景と現代の見える景色には、時代背景的に大きな差があると講師は語ります。

子どもの頃に何気なく歌った歌でも、残る歌と消えゆく歌があるかもしれないことを、受講者は気がつくことになります。

日本の歌の中にある懐かしい情景を想像できる受講者たちは、この講座の価値に気づくことのできる世代の方たちでもありました。

日本の唱歌と童謡 共通定義

今日の私たちの持っている音感、実は西欧音楽で培われた賜物だそうです。明治時代に欧米に学んだ役人が、人を育む上での重要な要素として音楽も教科に加えたことに由来します。さらに「歌で世代間交流ができるように」との意も込められているそうです。教科書に掲載(採択)された文部省唱歌による影響は大きく、明治生まれ以降なら世代が違って、同じ歌を知り口ずさめられるよう学校で教わっています。教科書にある歌がどの年代の人とも歌い合えるよう配慮されていたとは知る由もないことです。

対して童謡は、唱歌よりも子どもが歌いやすく楽しいと感じることを追求した子どものための歌。「子どもにもっと身近な歌を」と追求した大人たちがいた時代があったそうです。大正 7 年(1918 年)創刊、有名な子ども向けの児童文芸雑誌『赤い鳥』にも、詩人 北原白秋などによる言葉遊びに繋がる歌が掲載されていて、自由な子どもの心を育むことをモットーに作り出されていた歌が「童謡」とのこと。

講師はこの 2 つの歌「日本の唱歌」と「童謡」を取り上げて講義を展開されました。新しい季節が本番を迎える前に開催される講座のため、途中から参加する受講者には共通定義として、前回受講された方にはおさらいとして、唱歌と童謡の誕生と特徴に毎回触れながら、各季節の歌を解説されました。

受講者の楽しみ

歌の成り立ちの端々で、講師が解説されるエピソードの興味深いこと！作者と同じ視点で歌を顧みて解説されていく中にも、作詞家・作曲家への敬意や歌への熱い思いが感じられます。

時には、講師が AI で作成した昔懐かしい日本の故郷や歌の情景を絵や写真で披露され、受講者が歌詞の中の情景を想像し易いよう見せながら解説されました。

またある時、講師が音楽家だからこそ気がつける話題を披露されました。ある童謡が特撮テレビ番組「ウルトラマン」の歌の音律と類似している点を取り上げられ、作曲者の少年時代と照らし合わせて誕生したであろう仮説をユーモアに語られる場面もあり、受講者には大いに受けました。

講師による、理解するための親しみ易い工夫が、歌を知り楽しみに繋がる講座でもありました。

文部省唱歌
1872 年

童謡
1918 年

文部省唱歌

1947 年

1955 年

新しい子どものうた

2000 年

テレビ主題歌

秋の歌を中心に(2025.9.27)

とっても有名な歌なのに!? 大切にされない作曲家の寂しさ、作詞家の闘いなど

子どもの歌としてなじみ深い「どんぐりころころ」は札幌出身者の作曲家 梁田貞[やなただだし]によるもの。

しかしその功績にも関わらず、地味な石碑がひっそりと(札幌)市内に建っているだけという、釣り合わない、寂しい現状にあるとの話。石碑の場所は受講者の誰も知っている人はおらず、講師から伝えられると驚きです。

歌もユニークですが成り立ちすら可笑しさが連なる、愛嬌のある狸の歌「証城寺の狸囃子」(作詞:野口雨情[のぐちうじょう]、作曲:中山晋平[なかやましんべい])の話や、戦争時代に軍人による歌詞への厳しい指摘に抗して、機知と誠意の一言で変更を免れた作詞家 石森延男(いしもりのおお) (札幌出身)のエピソード「野菊」の歌の話など、講師の歌を巡る背景の語りには引き込まれます。

受講を終えた教室の窓からは、猛暑の去った夏の終わりの爽やかな景色が見え、秋の歌を教わり帰路に着く受講者は、すがすがしい気分教室を後にしたことでしょう。





冬の歌を中心に(2025.11.8) 童謡の成り立ち、子どもが口ずさめる歌

季節先取りの講座として開催するはずが、当日は朝から雪が積もり、ようやく教室に辿り着いた受講者の皆さん。冬を迎え始めたことに気がついた日の開催でした。

この回では日本の歌作りの変遷にも触れられました。

日本の音楽家も初めは曲を作る力はなく、西洋音楽の曲に日本の詞をつけていたため、難しい用語が連なる歌が多かったという文部省唱歌。もっと子どもにとって馴染みよく、身近に歌を歌えるよう、話し言葉の表現に変えて歌詞をつくる風潮が現れ始め、今も歌い継がれる「お正月」はそのひとつだそうです。(作詞:東くめ[ひがしくめ]、作曲:滝廉太郎[たきれんたろう])

歌詞からも、子どもが親に尋ねるような「もういくつ寝るとお正月」というはじめは、その光景さえ思い浮かびます。歌が子どもにとって身近なものであるようにと子どもの心を育むことを意識し、心を込めて洗練された言葉を選び、歌詞や歌曲のメロディを考える人やグループができた時代。「唱歌に疑問を持った人たちが生み出した童謡は磨かれて世に出て行った歌」であるそうです。

「雪やこんこ」や「たきび」、「紙鳶(凧)の歌」、また「スキー」の歌などが紹介され、講座の後には早くも春の歌の講義をお願いする受講者の声がアンケートに見られました。



春の歌を中心に(2026.3.24) 春の到来間近。受講者による歌講座の魅力再発見！

「寒さも弱まりひさびさの受講、楽しい時間でした」と受講者。冬をようやく抜け出した春の講座では、受講者も増えました。

春の講座終わりの質疑応答では、講座の新たな位置づけを口にした受講者がいました。講座による音楽療法としての効用を講師に質問する方がいたのです。歌の成り立ちなどを学ぶ講座が、いつの間にか、人の心を癒す講座になり得ていたという、新しい魅力の発見です！癒しの作用を受け取っていたことに気がつく出来事でした。

感想の中には日本の美しさに感動しつつも、今の小学生が唱歌・童謡を聞いて歌詞がイメージできないのではないかと心配する声も。待ち遠しい春を感じて「春の小川」の歌から風景を思う嬉しさを伝える方や、日本の四季の美しさに日本に生まれて良かったという感想を述べる声もありました。



夏の歌を中心に(2026.7.4) 歌の誕生と時代背景。どの歌にも思いがけない秘話がある

七夕を控えた夏の講座。全季節を通して受講した方 3 名を含めて最後の講座です。

「たなばたさま」の歌は、歌詞からも、笹の葉の揺れる描写と、子どもの短冊にかける願いが歌詞となっていて、どの人にもシンプルに受け入れられる歌です。(作詞:権藤はなよ[ごんどうはなよ]、補作詞:林柳波[はやしりゅうは]、作曲:下總皖一[しもおさかんいち])

しかし意外にも文部省唱歌に採択されるまでに時を費やした運命の歌。学校の制度が変更されて教科書が刷新し、候補となっても落選したものを、補作詞者の林柳波がアレンジを加えてようやく採択された歌だそうで、歌い継がれる身近な歌に苦労のエピソードです。苦労繋がりとして、戦争に翻弄される時代にできる歌であっても、教科書編纂委員達はできるだけ戦争美化につながる曲を避けて、四季や風物にまつわる歌を作ったといい、同じ作曲者の「花火」の歌も紹介されました。歌を生む人々の並々ならぬ思いが今も残っています。(作詞:井上起[いのうえたけし]、作曲:下總皖一[しもおさかんいち])

講師によれば、日本人は昔から和歌を詠む時代もあったからでしょうか、歌で四季や願いを伝えようとするアイデンティティがある、と語ります。

歌講座の最後は「みかんの花咲く丘」。戦後の日本で共感できる歌詞が評判を呼び人気となった歌です。今も伝わるこの歌は、子どもの手遊び歌としても歌われており、受講者の皆さんが子どもの頃に親しんだ歌でした。(作詞:加藤省吾[かとうしょうご]、作曲:海沼實[かいぬまみのる])

受講後のアンケートから

幼いころに歌を習ったことを思い出せないものの、口ずさめる不思議さを感じながら講座を受講していたという受講者。地域のお祭りのように大切に残っていて欲しい、と願う声がありました。

もと保育士の受講者からは、教科書の歌が世代の違う者同士の交流を見越しての採択と知っても、今の少子化や諸般の事情から伝える機会も少ないという現実も感じたそうです。しかし、少しでも子どもたちに歌を伝えたいと記されていました。

介護士の受講者からは、講座で知った歌があり、新たな気づきがあったと明かしてくれました。ある高齢者がよく昔の古い歌を歌っていたが、歌を知らないのもその意図がよくわからなかったと。しかし、講座で偶然その歌詞が紹介され、「その高齢者に少しでも近づけた気がして、参加して良かったと思えた瞬間でした」との感想がありました。昔、音楽により育まれる世代間の繋がりを信じて置かれた布石が、今の世で功を奏した出来事です。

日本の唱歌と童謡の講座は、歌に馴染んだ世代には時に癒しとなり、世代を超えた交流のきっかけにも、また歌から思い浮かぶ日本の情景や歌詞にある日本語の美しさにも心動かされるようです。しかし、現実として継承する難しさが、もどかしさやもったいないといった思いも綴られ、感想は受講者により実にさまざま。

季節を巡る歌の 4 講座では、歌の魅力に気がつくと共に、これまで知らなかった自分の中での新たな価値を見出す再発見の機会でもありました。

このことは、一層、懐かしい「歌」を大切に思う気持ちに繋がったことでしょう。

